



子どもの頃、友達と遊んで家に帰ると、母から「今日、あんた、本山橋のほう、行っとったんな。」と行動が筒抜けになっていることがありました。「なんで知っとん？」と聞くと、「ひろし君のお母さんが、ゆうじを見かけたって言よったよ。」と教えてくれました。また別の日に近所の小道で遊んでいたら、犬を散歩させていたおじさんに、「ここは遊ぶ所と違うが！」と叱られたことも覚えています。よく「お天道様が見ていますよ」と言い聞かせられましたが、地域の至る所にお天道様がいました。

昔ながらの風景

始業式の日から毎日、子どもたちの集団登校に地域の方が付き添ってくださっています。1年生はもちろん、上級生にとっても初めての通学路です。登下校の安全確保が開校前から心配されていましたが、ご協力のおかげで安全が保たれています。

そんな登校中の一場面です。

その日は雨模様でした。地域の方と一緒に、子どもたちは上手に一列で歩いていました。ちょうどぬかるんだ地面の横を通る時、ちょっと試してみたくなったのでしょうか。一人の子が、地面に傘の跡を付けながら歩きました。即、付き添っていた方が、「コラ、そんなことをしたらいかんが。」と注意をしてくださいました。

その子はきまり悪そうな表情を浮かべ、でも素直に聞き入れて、また歩き始めました。地域の方に見守られ、時にはお叱りを受けながら歩いていく風景は、今も引き継がれています。



しかし、地域の方のご協力に甘えてばかりもいられません。いつもそばに地域の方がついていてくれるわけではありません。「自分の命は自分で守る」という意識を育てるため、15日には、交通指導員をお招きし、1年生の交通教室を開きました。左写真は、マットを横断歩道に見立てて、横一列になって道路を渡る練習をしているところです。

「国語の勉強も、算数の勉強も大切。でもそれよりも大切なのは、自分の命を守るお勉強です。」子どもたちにはそう伝えていきます。

一歩ずつ 積み上げながら

先週のある朝、学校に着くと、砂場には、前日に子どもたちが作った砂山がそびえていました。

豊中小学校は今、何も無いところから一歩一歩土台を積み上げているところです。子どもたちと共に、地域の方々の力をお借りしながら、この砂山のように、美しく堂々とした学校にしていきたいと思えます。間違っても「砂上の楼閣」とならぬよう、気を引き締めながら。

